地理学報告10号発刊によせて

成瀬　敏郎

「地理学報告」は，このたび10号を刊行することになり，一つの節目を迎えた。第1号は今から10年前，修了生である竹部嘉一氏の呼びかけと，藤井宏志先生のご尽力で刊行されたのである。その後，順調に発刊され，途中の5・6号が合併号であったので，10年間に9冊が刊行されたことになる。じつのところ，私は10号までは刊行が続かず，途中で廃刊になるのではないかと考えていたのであるが，杞憂に過ぎなかった。そして，この巻頭言を書くにあたって，あらためて1号からの内容を読み返したところ，10号にはそれなりの風格が備わってきたように感じられる。10という数は不思議な数字である。

こうした研究室報告についてはその存在意義が問われることが多いのであるが，研究室でどのような研究が行われてきたのか，そして将来的な教育・研究方針を模索する場合に参考になるので，それなりの意義があると思っている。なお，今号には卒業生・修了生の論文概要だけでなく，研究室スタッフ3名の研究概要をも掲載している。

さて，兵庫教育大学が1978年10月に創立され、岩手大学農学部から本学に赴任された白井義彦先生が地理学研究室の創設にあたられた。先生によって地理学の教育研究に必要な設備・備品が整えられ，1980年4月に第1期の地理学専攻の修士課程大学院生を受け入れている。当時，購入された備品類の多くが現在も残っており，現役のものも多い。研究室の歴史を振り返るときに，その基礎づくりに奮闘された白井先生の存在を抜きにして語れない。

翌年には私が赴任、順次，藤井宏志先生、吉本剛典先生，南埜猛先生が赴任された。その後，白井先生と藤井先生は他大学に転出され、現在は吉本・南埜両先生と私の3名が在籍している。研究室が発足した当初は何もない環境であったので，学生を十分指導できるのだろうか，他大学に比して遜色のないレベルの学生を教育できるだろうかなどの不安が先にたったが，他大学にはない新しい研究分野を開拓・発展させようという気概は旺盛であった。

このような経緯で地理学研究室が発足し，はや25年の歳月が経った。この間，地理学研究室の卒業生・修了生は総計247名を数える。このうち学部卒業生は1～19期で146名、在学生は4年生が4名、3年生が5名の合計155名である。修士課程修了生は1～23期が85名（内8名は学部から進学した者）、在学者が9名である。博士課程は在学者を含めて4名、うち博士号取得者は2名である。外国人留学生は3名（博士課程1名を含む）である。卒業生・修了生は教育界をはじめ各界で活躍している。

現在の地理学研究室は，社会系と総合学習系の両方の教員３名と大学院・学部の学生から構成されている。それは，とかく専門分野，あるいは講座というセクト主義に陥りがちな大学のなかにあって，地理学という広領域で学際的な学問の特性を生かそうと思っているからである。

研究地域も国内の研究だけでなく，広く海外の研究もさかんに行っている。海外のフィールドは，インド，中国，韓国，トルコ，ベトナムなどを中心としたアジア各国が中心である。本号にも国内の研究だけでなく，韓国の研究例も掲載されている。

研究指導にあたっては，研究が机上の空論に陥らないように，実際に自分の目で事実を確かめることが何よりも大切であり，可能な限り現地調査の必要性を説いている。そして学問成果の輸入だけで満足せず，世界に向かって研究成果を発信できる研究室であるよう努力を続けているところである。